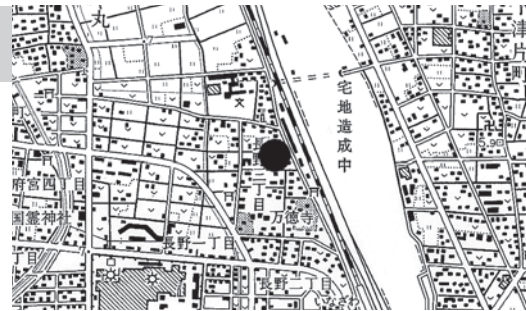


ながの きたうら

長野北浦遺跡

所在地 稲沢市長野
(北緯35度15分25秒 東経136度49分04秒)
調査理由 都市計画道路稲沢西春線建設
調査期間 平成20年4月～平成20年10月
調査面積 1,500㎡
担当者 石黒立人・蔭山誠一



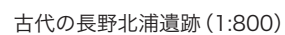
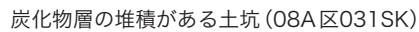
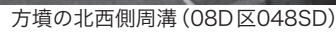
調査地点 (1/2.5万「一宮」)

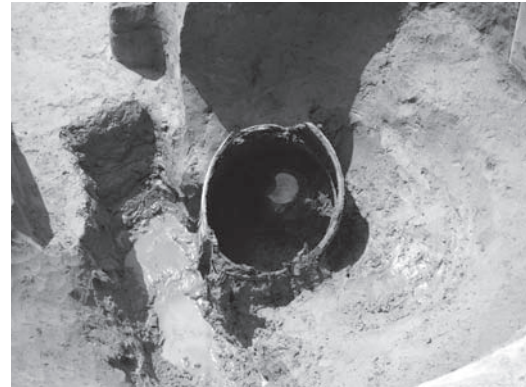
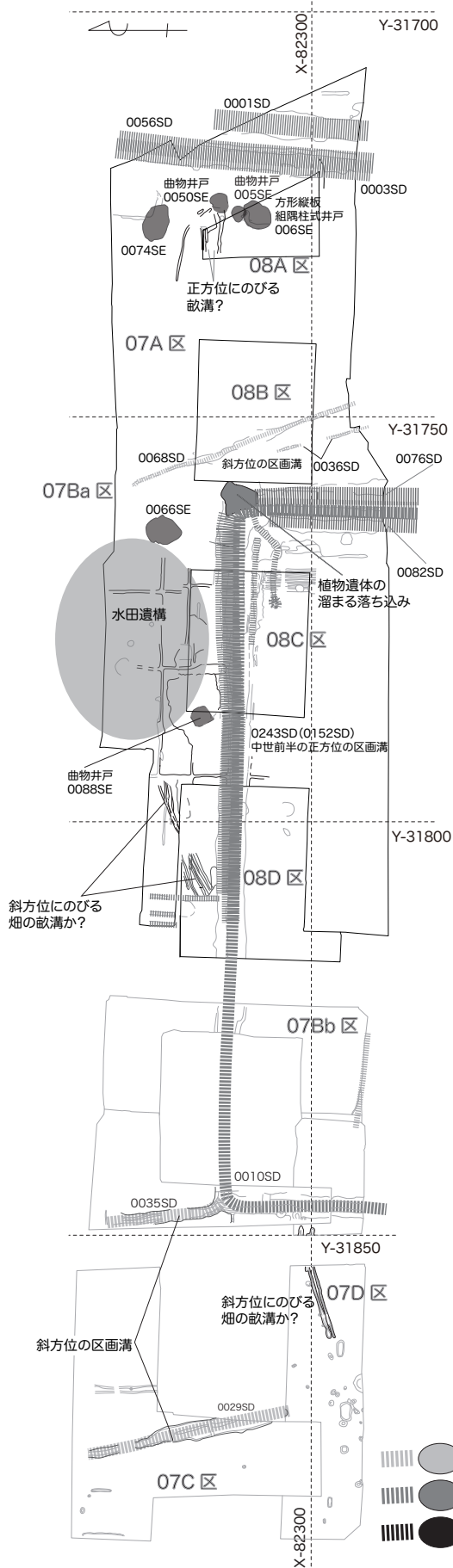
調査の経過 長野北浦遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。
本遺跡は稲沢市東部、JR東海道本線稲沢駅より北北西約500mに位置する遺跡で、地形的には西の三宅川と東の青木川にはさまれた微高地の縁辺に立地する。同事業に伴って発掘調査を実施した塔の越遺跡は西に隣接する。

調査の概要 調査区は07A区と07Ba区の間にある未調査部分を、東から08A区～08D区とした。
遺構と遺物は古墳時代前期から古代、鎌倉時代から室町時代前半、江戸時代の大きく3時期に分かれる。古墳時代前期は竪穴住居3棟、方墳の周溝と土坑がある。竪穴住居は方墳の形成される以前のもので、一辺3～4m程の平面隅丸方形の小型住居であった。古墳の周溝は昨年度07Ba区にて検出された方墳の一部であり、方墳周溝の北東外側と北西外側に周溝掘削以前の落ち込み状土坑を確認した。この落ち込み状土坑には炭化物層と焼土層が伴う被熱痕が複数みられ、内部に炭化材を伴う柱穴が複数確認できた。古墳築造に伴う儀礼等の痕跡の可能性もある。また方墳周溝の上層には、基盤層である黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土質シルトが斑土となる人為的埋没痕跡を確認でき、9世紀に属する須恵器が少量出土したことから、方墳の周溝は9世紀頃までにはほぼ埋没していたものと考えられる。

中世の遺構では昨年確認された万徳寺の北に展開する正方位の区画溝の続きが確認できた。この区画溝は鎌倉時代のもので、断面逆台形の溝から断面「V」字形、断面「U」字形の溝へと変遷することが確認でき、区画溝と同時期に水田遺構と畑の畝状溝が存在する可能性が高い。この正方位の区画溝が掘削される以前には、12世紀にさかのぼる可能性のある北北西から南南東にのびる溝2条があり、正方位の区画溝以前に地形の傾斜に沿った区画が存在した状況がみられた。また正方位の区画溝が埋まった後である14世紀後半～15世紀には、区画溝の北に3基の井戸が確認でき、中世万徳寺に伴う居住域が拡大する状況を確認できた。

正方位の区画溝が埋まった後の遺構を主に戦国時代から江戸時代の遺構と考えた。江戸時代前半期以前には、水田遺構や畑の畝状溝、これらに伴う用水路が全面に展開し、続く江戸時代後半期には08A区の東端から08D区西側に屋敷地が展開する。特に江戸時代後半期には結桶を伴う井戸と柱材や礎板が残る柱穴、屋敷地を囲む区画溝が複数重複する状態が確認でき、複雑な遺構変遷が想定された。(蔭山誠一)

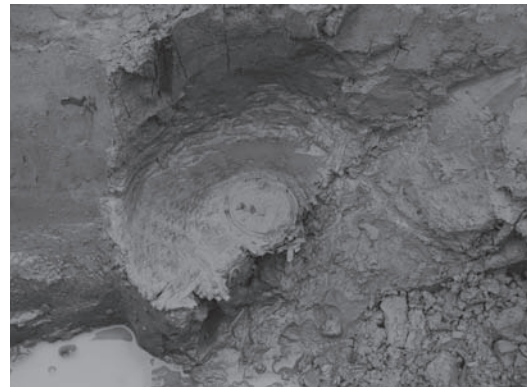




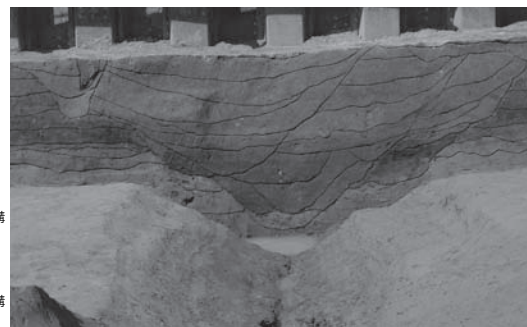
曲物を伴う井戸
(08C区088SE)



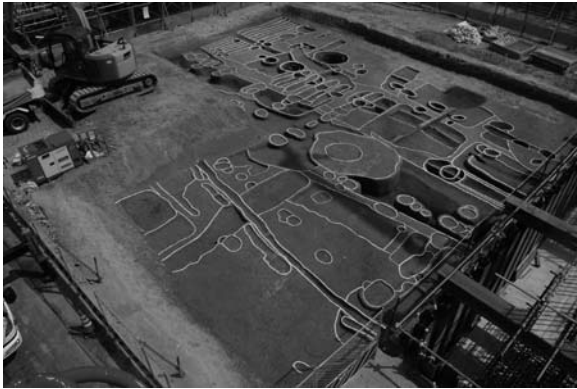
方形縦板組隅柱式井戸
(08A区0066SE)



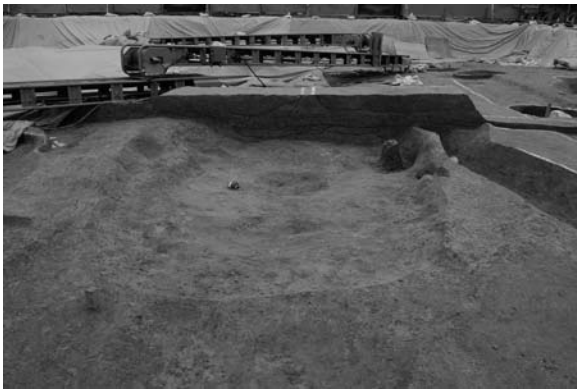
曲物を伴う井戸の下にあった
木製編み物 (08A区0055SE)



正方位の区画溝 (08C区西壁)



08C区1面全景(北西より)



江戸時代の大型土坑(08B区026SX)



江戸時代後半の柱穴群(08B区東より)



江戸時代後半の柱材と礎板(08B区)

